

発明の周辺：その1「これからの日本」

松原, 幸夫
元九州大学教授

<https://hdl.handle.net/2324/4737393>

出版情報：知財コンサルブログ. 17, 2021-04-12. 日本パテントデータサービス株式会社
バージョン：
権利関係：



発明の周辺 その1 「これからの日本」

松 原 幸 夫

これから世の中は、どのようになっていくのだろうか。

「発明の周辺」では、ものづくりや発明について、その時々に関心したことを書いていく。発明のあり方を考えるにしても、その前提となる社会や人々の暮らし、ものづくりのあり方について考えておかないと、現代のような変革期にはどちらの方向に進んでよいかわからない。

このようなことを考えているうちに、ある言葉が浮かんできた。それはわが国の高度成長を政府側から牽引してきた下村治博士の次の言葉である。

- 一、 日本経済は美しい白鳥となる可能性を秘めている。
- 二、 日本は江戸時代のような姿になるのがいい。
文化とか芸術とか教養に力を入れる時代になるべきだ。

(昭和 35 年池田勇人総理大臣が「10 年で月給が 2 倍になる」のキャッチフレーズで、「国民所得倍増計画」を打ち出したが、この計画の生みの親が大蔵省出身のエコノミスト下村治博士である。その時出されたのが一番目の言葉で、安定成長期に入ってから出されたのが二番目の言葉である。)



その後、日本も世界の国々も物質的繁栄への道を邁進してきた。そして今その臨界点に達し、次のステージに移ろうとしている。

しかし、当時の日本と現在のわが国を取り巻く環境は全く異なっており、また江戸時代に戻れといわれても具体的にどのようにしてよいかわからない。

では下村博士がいていた江戸時代とは、一体どのような時代だったのか。下村博士の話から数十年経ってしまったが、進路変更するにはもう遅すぎるのだろうか。

実は、江戸時代の初めの 50 年は街道や橋を整備したり、新田開発をしていた。わが国の歴史上最大のインフラ整備が行われたといわれている。しかし、開幕からちょうど 50 年が経過した頃、全国各地で森林を伐採し乱開発をしたため、大洪水や土砂崩れが起き、せっかく開発した土地が荒らされてしまった。

そこで 1666 年に幕府は「山川掟」を出し今後の乱開発を一切停止した。新田を開発するよりも、今まであった田畑にできるだけ労働力と費用をかけて、それを大事に育てたほうが結局は日本の農業のためによいと考えたのである。効率的に農業を行うために、農業技術の向上や品種改良を徹底的に行い、「農書」と呼ばれる農業関係の書物も多数出版された。

また国内にある資源の再点検をし、これまですべて輸入に頼っていた絹なども国産化した。昆布、なまこ、フカヒレといった海産物を新たに見つけて、主要な輸出産業として育成していった。



つまり、江戸時代は最初の 50 年は急速にインフラ整備を行ったが、その後は徹底的にそのインフラを使いこなすことに注力していった。インフラを使いこなすにはそれを整備するほどの財源がかからないので、その余った財源を減税に回した。これにより庶民の生活水準が向上し、豊かな元禄文化が開き、その後二百年続いた文化立国への方向転換に成功したのである。

戦後のこの 75 年は、わが国の歴史の中では江戸時代初期に匹敵するような大インフラ整備時代だった。そうであれば、今回の危機は、江戸時代を凌駕するような文化立国に転換するチャンスが到来したということもできる。

チャンスはピンチの顔してやってくるという言葉があるが、大変厳しい昨今の世界情勢のその先には明るい未来が開けているのではないだろうか。

参考文献：「江戸時代に見る日本型環境保全の源流」（農文協）

(2021/11/12 改訂)

